

# 西洋の製本の歴史と研究動向

## 日本の大学図書館が所蔵する資料の取り扱いの理解にむけて

安形 麻理

### 1. 製本研究の意義

#### (1) 製本研究の動向

製本とは、印刷された（書かれた）本文紙を一定の順序に重ねて綴じ、表紙を付けて保護することである。一時的な保護もあれば長期的な保存を目的とする場合もある。その素材や技法は時代や場所により様々な発展を遂げてきたが、機能性と装飾性という二つの面を持つことは変わらない。

私たちが見慣れている現代の本は洋式の製本で、出版社が本の内容に合わせてデザインした装丁で書店に並ぶ。表紙と背には標題や著者名が記され、どこで購入しても見た目は変わらない。しかし、これは19世紀以降と比較的最近のことであり、それ以前の本は通常は未製本シートや仮綴じの状態では流通していた。

西洋の書誌学において、製本はかつて印刷史や出版史に比べて周辺的なものとみなされることもあったが、本の流通や受容に焦点を当てる近年の動向の中で、より重視されるようになってきた。本の物理的な形態が読者による受容に影響を与えること、同時代の製本や後世の再製本を含むそれぞれの現存本に固有の特徴が、読者について、また読者のその本に対する評価について知る手がかりを与えてくれることが次第に認識されるようになったからである。

たとえば、西洋最初の活版印刷本であるグーテンベルク聖書は、48部の現存本のうち10部が15世紀の製本を残しており、うち3部が印刷地であるマインツで製本されたと推定されるが、

いずれも少しずつ異なっている。現存本の半数以上が、愛書家の世紀と呼ばれる18世紀とそれに続く19世紀に再製本されたものである。経年劣化による再製本もあったと思われるが、再製本の美しさには、初期の印刷本を「インキュナブラ」として格別な関心の対象とするようになっていた事情も反映されていると考えられる。

西洋の製本について書かれた文献は多く、1987年に編まれた書誌には1985年までの8,033件の文献が収録されている<sup>1)</sup>。19世紀末のイギリスで書誌学会（Bibliographical Society）が成立した頃からは、審美的な関心にとどまらず、歴史的な手がかりとしての製本に対する書誌学的な関心が高まり、表紙のデザインや装飾に使われるツールの研究が進み、製本された時代や地域の推定や、優れた工房や職人の同定が可能になっていった。次第に製本という観点からの体系的な収集の必要性が意識され、コレクションの形成が始まった。近年は製本に特化したデータベースも充実しつつある。たとえば、現在も構築が続く英国図書館の製本データベースには、15世紀から20世紀の実例が画像つきで掲載されている<sup>2)</sup>。プリンストン大学図書館が簡素なものから豪華なものまでの211点を26カテゴリー（イタリア、フランスなどの地域や、技法上の特徴など）に分けて示した展示会のオンライン版も貴重な情報源である<sup>3)</sup>。

ただし、フット（Mirjam M. Foot）は、従来の研究の主たる対象は王侯貴族が所蔵する美しく華麗な装飾であったこと、つまり製本された本

全体の限られた一部にすぎないことを指摘し、ありふれた製本や構造そのものにも注意を向ける必要性を指摘している<sup>4)</sup>。

ピアソン (David Pearson) も、モノとしての本を考えるうえで製本の全体像を把握することの重要性を論じている。彼は手引き印刷機時代のイギリスの製本スタイルと歴史を技術面に重点をおいて論じた著書 *English Bookbinding Styles 1450-1800* の中で、美しい装飾のみならず廉価で一時的な製本について 1 章を割いている<sup>5)</sup>。

日本の図書館に所蔵されている洋古書は、華麗な装飾を施された製本というより、内容に重きを置いて収集されたものが主であると考えられる。とはいえ、重厚な総革装本から 18 世紀の仮綴じの政治パンフレット類、あるいはそれをまとめて製本したものなど様々であろう。

製本の素材や構造を歴史的な文脈に位置付けて理解することは、洋古書を適切に管理し、劣化の状況を見極めて修復し、閲覧環境と道具を整えて利用に供し、保存するうえで重要である<sup>6)</sup>。さらに、明治期の日本には西洋の本とその製本術が積極的に導入され、日本で制作される本の形に短期間のうちに大きな変化をもたらしたことから、日本における洋式製本の初期の試行錯誤についても理解しておく必要がある。

## (2) 読むための本と書くための本の製本

ここで一点確認しておく。一般に本というと、たとえ通読はせずとも、読むために印刷された(あるいは書かれた)本を指す。他方、会計帳簿や台帳、日記帳など、白紙を束ねた「書くための本」も多様な用途で制作され、中世以来、製本業の大きな一角を占めてきた。前者は特に区別する場合には印刷本の製本 *letter press binding*、後者は帳簿製本 *account book binding* または *stationary binding* と呼ばれる。

帳簿製本は古くは *vellum binding* といった<sup>7)</sup>。イギリスで帳簿製本に携わる職人の同業者組合が 1823 年に作られた際には、*vellum binders' (account book) society* という名称であった<sup>8)</sup>。ただし、綴じの支持体に羊皮紙を使い、印刷本の表装材としては羊皮紙が廃れた後も 18 世紀まで羊皮紙を使うのが標準的ではあったものの、帳簿製本の表装材は羊皮紙とは限らない。20 世紀以降の文献では、*vellum binding* とは表紙に羊皮紙を用いた羊皮紙装一般を指すことが多いため、注意が必要である。

書誌学的な観点から製本について述べる際には *letter press binding* のみを対象とすることが一般的であるが、製本のマニュアルでは二種類の製本がそれぞれ扱われることが多い。

帳簿製本は、図書館資料としては相対的に所蔵が少なく、文書館や博物館の方に多いと思われる。そこで、帳簿製本については、森脇優紀の論考<sup>9)</sup>や前述の製本マニュアルに譲り、本稿では主に読むための本の製本について述べる。

本稿では、日本の大学図書館における洋古書と洋式製本を適切に取り扱うためのよりよい理解に向けて、西洋における製本の概略をまとめた<sup>10)</sup>。2 章では西洋の基本的な製本の工程、製本のタイミングと主体、製本様式と本の収納方法との関係、製本師の記録、3 章では日本への洋式製本の導入について簡潔に述べた。

## 2. 製本の流れ

### (1) 基本的な製本の工程

産業革命以前、つまり、国によって多少の違いはあるものの 1830 年代前後までは、印刷も製本も職人の手作業であった。こうした手かがりの伝統的な製本やその技術は、フランス語で *reliure* (リユール) とも呼ばれる。

国や地域により、デザインのみならず、製本の構造や作業工程さえも少しずつ異なっていた

ことが近年明らかになりつつある。とはいえ、伝統的な綴じ付け製本の基本的な工程は共通しているため、ここで簡単にまとめる。綴じ付け製本とは、本文紙を糸で綴じるときの支持体を表紙につけることで本文紙と表紙を一体化する伝統的な手法である。文字による説明には限界があるため、製本技法の解説書である『西洋製本図鑑』<sup>11)</sup>掲載のカラー写真や、前述のピアソンによる著書の図版も参照されたい。

まず、本文紙を判型 (format) に応じて正しく折り、折丁 (gathering, quire) とし、丁合を確認する。差し替え紙や本文とは別に刷られる銅版画などを正しい位置に挿入する。

折丁を数丁ずつハンマーで叩いて平らにする。

折丁の背 (spine, back) を革や麻紐を支持体として針と糸でかがる。中世以来、手引き印刷機時代を通じて flexible sewing と呼ばれるかがり方が一般的であった (図 1)。16 世紀までは、通常この段階で花布 (はなぎれ : headband) をつけた。かがった場所は盛り上がり、背バンドとなるが、18 世紀後半のイギリスでは盛り上がらない方法が考案され、流行した。

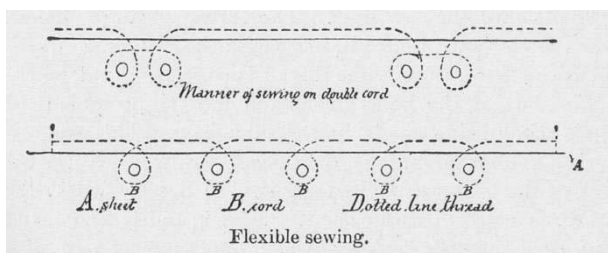


図 1 綴じ (flexible sewing)

出典 : Zaehnsdorf, Joseph W. The art of book-binding: A practical treatise. London, G.Bell and sons, 1925, p. 27.

本の前と後ろには紙や革の見返し (endpaper, endleaves) を付ける。見返しは表紙の開閉による負荷の緩衝、汚れ防止や装飾の役割を持つ。独立した折丁を本文の折丁と共に綴じ表紙の内

側の表面にのり付けする「綴じ見返し」、巻頭と巻末の丁それぞれに二つ折りにした見返しをノドで貼り付ける「貼り見返し」、二つ折りにした見返しを本文の折丁に巻いて綴じた「巻き見返し」の三種類を基本に、色々な組み合わせやヴァリエーションがある。それぞれ負荷の吸収の度合いが異なるため、綴じ見返しをもつ本の綴じや背の構造を変えずに、修理の際に貼り見返しに替えてしまうことにより、本文紙の破損を招くことがある<sup>12)</sup>。見返しと対になった紙は遊び紙 (free-endpaper) と呼ばれる。17 世紀後半からは大理石模様の紙 (マール紙) を使うことが多い。さらに遊び紙 (fly-leaf) という白葉紙 (binder's blank) を入れる場合もある。見返しや遊び紙は、通常は印刷者が印刷した本の一部ではなく、製本業者に由来するものなので、記述書誌においては記述の対象外となる。

本の背に丸みを出し、耳を作る。

厚表紙 (board) に、かがり糸の端をつける。厚表紙の素材は、15 世紀後半まで (大型本では 16 世紀末まで) 樫などの堅い木が使われたが、やがて紙をはりあわせたもの (pasteboard) になり、18 世紀には厚い板紙 (millboard) になる。

ページの天あるいは三方の端を切り落とし (化粧裁ち)、小口を装飾することもある。

背の上下 (天地) に花布を接着する。

厚表紙を革で覆う。その際、不要な羊皮紙や紙を補強材として背の部分に入れることがあり、後世に貴重な発見につながることもある。手引き印刷機時代は、表紙と折丁の背を密着させるが柔軟性はある軟背 (flexible back) が標準的であった。現在のハードカバーで一般的な腔背 (ホローバック : hollow back) は、フランスでは 18 世紀後半、イギリスでは 19 世紀初頭に登場したもので、19 世紀以降に一般的になった。

表紙 (表表紙と裏表紙 : upper cover & lower cover) に装飾を施す。模様を彫り込んだ金属製

(通常は真鍮)の道具を熱し、革にあて型押しする。古くは空押し(blind)であったが、やがて金箔を施すようになる。型押し輪機、筋車、いちょう、文字や模様など多くの種類がある。通常は装飾と本文の内容は関係がなく、装飾は地域や時代、工房の特定の手がかりとなる。

## (2) 製本のタイミングと主体

ここでは、製本が造本工程のどのタイミングで誰により行われるかという観点から説明する。

写本は基本的に注文生産であったため、注文者の予算と好みに応じ、製本工によって個別に製本された。宝石をあしらった豪華な表紙、フランス王室メンバーのために作られた百合の形の写本、携帯に便利なガードルブックなど、読者に合わせて工夫できた。


印刷本の時代になっても、それは変わらなかった。本は印刷済みの未製本シートあるいは仮綴じの状態に流通し、読者は購入後に職人に予算や好みに応じて製本させた。印刷所が製本所を兼ねることもあったが、製本は通常は印刷そのものとは切り離された工程であった。製本は手作業であったため数をこなしても単価は安くならなかったこと、地方の書店にとっては未製本の折丁のまま輸送する方が安かったことによる。また、イギリスでは1534年の法律で製本済みの本の輸入と外国人による卸売り以外の書籍販売が禁止されていた。

しかし、すべての手がかり製本が注文による製本であったわけではない。予め製本され販売されたものには以下の類型がある。注文による個別の製本と既成の製本は、見た目でも必ずしも区別できるとは限らない。

小売り製本(trade binding)とは、小売書籍商や卸売り業者あるいは出版者が販売前に製本したものを指す。様式は様々で、一般化は困難だが、文字や模様のない簡素な装丁が多いとされ

る。16・17世紀にはしなやかな羊皮紙(limp vellum)・羊革・子牛革、18世紀には子牛革が一般的に使われた。18世紀中頃まで通常の小売り製本では、高価なもの以外、背にタイトルの文字は入らないのが普通であったが、その後の所有者が、識別、見栄え、統一性への情熱などから、製本された本の背に箔押しなどの装飾を付け加えたりすることも珍しくなかった。小売り製本に関する近年の研究の進展により、販売前に製本されていた本の割合は従来考えられていたよりも高いこと、必ずしも簡素な装丁とは限らないことが明らかになりつつある。

卸売り製本(wholesaler's binding)は、卸売り業者が、未製本の折丁の状態の本を仕入れ、出版者とは無関係に大量に製本したものである。

版元製本あるいは数物製本(edition binding、publisher's binding)は、現代のように出版者の、または卸売り業者の注文と負担によって行われる製本である。ほとんどが表紙と中身を別々に大量に作って後から接着する「くるみ製本(case binding)」である。背はホローバックが多く、見返しは貼り見返しか巻き見返しが一般的である。くるみ製本は1820年頃、手引き印刷機時代の末期に始まる。初期は簡素なものだったが、装飾パネルや浮き彫りを機械で施すことが可能になり、趣向を凝らしたものが登場する。1840年代のイギリスでは装飾性の高いギフトブックが流行した。たとえば、 2は筆者架蔵の版元製本の例である。パネル装飾と金文字が入れられ、三方金に浮き出し模様が付けられた小口、ホローバックで、負荷がかかるジョイント部分は破れかかっている。

1850年以降は版元製本が一般的になる。同時期に、英語圏で出版されるほとんどの本の表紙の素材は、従来の革にかわり、扱いやすく紙よりも耐久性がある出版者製本用クロス装((publisher's) cloth)となった。

やがて装丁デザイナーも現れ、1870年代から80年代にかけてはジャポニズムの影響、90年代からはアーツ・アンド・クラフト運動やアール・ヌーヴォーの影響も見られた。

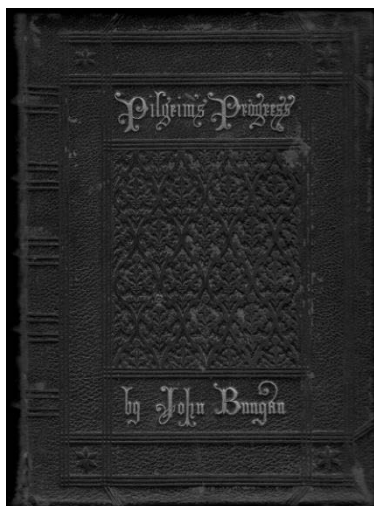


図2 版元製本の例

John Bunyan. *The Pilgrim's Progress: In Two Parts.*  
London, Henry G. Bohn, 1856.

### (3) 製本様式と本の収納方法

製本様式と本の置き方には密接な関係がある。ヘンリー・ペトロスキーの『本棚の歴史』はそれに着目した好著である<sup>13)</sup>。

中世の個人所有者・修道院図書室は、蔵書が少なければ本を鍵のかかる収納箱 (book chest) の中に入れるか、机の上に積み上げていた。

蔵書の数が多い場合は、部屋の周囲に作った傾斜した棚の上に表紙を見せて立てかける。そのため、凝ったデザインの表紙や、革を保護するための金属の鋳 (boss) がつけられる。

活版印刷術の発明により蔵書の数が増えていった結果として、15世紀末頃からは、書架に前小口を見せるようにして直立させて並べることが増えていった。しばしば本のタイトルが前小口にインクで書かれたのは、そのためである。フランスとイタリアでは最初から背を見せるように並べていたらしく、上等な製本の背に箔押

しの装飾が見られる。イギリスでは、17世紀の間に、小口ではなく背を外側に向けて並べる方式が次第に普及していった。

盗難防止のために鎖付き図書 (chained book) に仕立てられることもあった。後年、鎖や留め金、鋳などを表紙から外し、本棚に並べられるように改装した痕跡を示す本も残っており、本の置き方の変化を見て取ることができる。

書店や個人の蔵書でも、18世紀になると背を見せて並べることが一般的になっていった。そこで、識別のため、背には著者名、タイトル、巻数などを背に直接、あるいは革などのラベルに施し貼り付けるようになった。

### (4) 製本師の記録

12世紀に世俗的な本の流通が始まると世俗的な製本職人が現れた。徒弟から始め、職人となってギルドへ加盟するという流れはヨーロッパにおいてほぼ共通だったと考えられる。しかし、製本術の記録や手引書などの文字資料は、同じく本に関わる職人である印刷工や活字鋳造工に比べても少ない。

イギリスには独立した組合はなく、Stationers' companyの一部であり、地位も賃金もあまり高くなかったようである。製本工房の様子を描いた16世紀から18世紀頃の資料からは、2人から8人ほどの職人が1,2部屋で様々な作業に従事していた様子をうかがうことができる<sup>14)</sup>。

フランスでは1686年のレイ14世の王令により、製本職人・箔押し職人と書籍商・印刷業者の組合が分割され、書店は製本業を兼ねることができなくなり、紙か羊皮紙で包んだ仮綴本を製本することのみが許可された。この組合規則は1750年も引き継がれ、書籍商、印刷業者、製紙業者の製本と箔押しの作業の禁止が明記された。もっとも実際には必ずしもすべての規定が守られたわけではないようである。とはいえ、

製本職人のみがルリユール（手かがり製本）を許されたことが、読者が仮綴本（フランス装）を購入した後に好みに応じて職人に製本してもらおうという、フランス独特の読書文化を育んだといわれている<sup>15)</sup>。

18世紀のフランスでは、ディドロ・ダランベール編纂の『百科全書』に製本術に関する項目が120項目収録され、王立アカデミーが編纂した『技芸の詳述』にも製本職人が描かれている。製本に関する手引書も出版されるようになった。

19世紀になると、製本職人が自分の名前や住所を記した小さな製本者票（binder's ticket）を本につける例が出てきた。

### (5) 19世紀後半の洋式製本

ここまでで見てきたように、西洋では、産業革命を経た19世紀後半には、活字鋳造や印刷は機械化されており、個別注文の製本も残るとはいえ、版元製本が普及し、製本様式もクロス装のくるみ製本が一般的となっていた。日本に洋式製本が伝わったのは、こうした時期であった。

そのため、明治期の製本は工具による手作業ではあったものの、西洋の伝統的な綴じ付け製本が広く根付くことにはならず、版元製本が主流であり、また手かがりでもくるみ製本が行われた。

## 3. 日本における洋式製本の黎明期

### (1) 和装から洋装への移行

明治期の日本は洋書を輸入するとともに、洋式の印刷・製本技術を導入した。それまでの木版の製版印刷に替わり、西洋式の活版印刷術が導入され、徐々に普及した。当初は和紙に活版印刷して和綴じにした和装本の形を取り、やがて洋式製本術が採用されていった。西洋と同様、製本についての記録資料は少ない。しかし、20世紀末からの研究の進展により、和装本から洋

装本への移行は具体的に明らかになりつつある。

石井研堂の『明治事物起原』には、安政年間（1854-1860年）に江戸日本橋に住む藤右衛門が蕃書取調所（東京大学の前身）の原田一道の洋書を借り、それを解体して調べることで洋式製本を学んだとの記述がある<sup>16)</sup>。しかし、これについての詳細は不明である。蕃書取調所の後身である開成所からは、慶応2（1866）年に『英吉利英語篇』などが洋装本として出版されている。

牧野正久は、内務省が明治9（1876）年から刊行していた『版權書目』の記載中に「西洋形」という判型があることに着目した<sup>17)</sup>。そして、内務省統計に見られる納本資料の半数以下しか収録してはいないものの、記述が詳細な『国立国会図書館蔵書目録：明治期』を用いて、経済、物理、天文の三分野および暦書における和装本、洋装本（活字印刷の普通書）、欧文書の刊行数の推移を調査した。その結果、和装本は明治18（1885）年を境に減少し、一方の洋装本は明治10（1877）年頃に登場し、明治20（1887）年以後に主流となったことを明らかにした。ただし、暦書は明治末期までほとんどが和装本のままであり、分野により大きな違いがあることを示した。また、欧文書は少数ながら早い時期から刊行され、特に明治17（1884）年以降はほぼ毎年刊行されており、洋装本だったと考えられる<sup>18)</sup>。

大沼宜規は、牧野と同じ明治期の目録を用い、分野を限定せずに総体としての和装本と洋装本の比率を調査した。洋装本の導入は明治10年代に進み、明治19（1886）年には和装本より多くなり、明治20（1887）年以降は刊行の割合は高まるという結果であり、牧野の調査結果と一致した。ただし、分野によっても異なり、社会科学分野や自然科学・産業分野では洋装本への変化が速いこと、宗教的・倫理的分野や芸術・趣味的分野、日本人の伝記などでは明治末まで和

装本が用いられ続けたことを示した<sup>19)</sup>。

引野亨輔は読者対象が限定される宗教書に着目し、明治期に出版された仏教書を対象に、江戸と京都における木版・活版、和装・洋装の割合を調査した。その結果、東京の仏教系出版社は木版・和装による出版を続けた出版社と活版・洋装を導入する出版社に分かれ、明治 16 年から 20 年には活版が木版を凌駕するが、洋装本が主流になるのはやや遅れた明治 21 年から 25 年であった。一方、京都では修行中の僧侶を読者として木版・和装の組み合わせによる刊行を続け、活版・洋装の方が多くなるのは明治 20 年代後半以降であったことを示した<sup>20)</sup>。

遠藤律子らは、文献およびいくつかの典型例の調査に基づき、明治 20 (1887) 年までの和装本が主流の時期、明治 20 年代の和装本と洋装本の折衷が生まれた時期、明治 30 (1897) 年以降の洋装本に移行した時期に三区別できるとした<sup>21)</sup>。

白戸満喜子は本に使われている紙に着目し、『当世書生氣質』の明治 18 年から 30 年にかけて出版された 6 版を対象とした料紙観察から、和紙・和装、和紙あるいは和紙に近い紙・洋装、洋紙・洋装という三つの組み合わせがあることを示し、洋装への移行が洋紙の普及と密接な関係を持っていることを示した<sup>22)</sup>。

洋紙の生産は明治 7 (1874) 年に始まり、長い歴史をもつ和紙や良質で安価な輸入洋紙の存在からすぐに普及するには至らなかったが、次第に拡大を続け、明治 30 (1897) 年過ぎには和紙の生産量を凌駕した。明治 36 (1903) 年には教科書の紙が和紙から洋紙に切り替えられた<sup>23)</sup>。

こうした一連の研究からは、洋装本は活版印刷の導入に遅れ明治 10 年頃から刊行され始めたこと、分野により多少の時期の違いはあるものの、明治 20 年頃から洋装本の刊行数が和装本よりも多くなっていったこと、明治期末には洋

装本が主流となっていたことがわかる。

## (2) ボール表紙本

洋装本といっても一様ではなく、本格的な総革装からボール表紙本まで様々である。ボール表紙本とは、本文にボール紙（張子紙を使うこともあった）の表紙を付け、折丁を平綴じし、背をクロス（リボン）貼りにした簡易な製本様式である。当時の欧米で語学の教科書などによく見られた製本を日本でも模倣したと考えられる。この種の洋装本は南京綴じとも呼ばれた<sup>24)</sup>。

岩切信一郎は、日本近代文芸書、特に四六判サイズの小説本の洋装本化についての試論において、いわば疑似洋装本というべきボール表紙本と、紙装のくるみ製本の登場と定着という二つの段階があると指摘した<sup>25)</sup>。江戸時代の小説の代表的な様式であった合巻が、明治 10 年代中頃から後半にかけて紙型鉛版を用いた活版印刷による本文を和綴じにしたものになった（東京式合巻とも呼ばれる）。明治 16 (1883) 年頃には活版印刷の本文をもつボール表紙本の文芸書が急増し、明治 20 年代初期まで流行する。片面印刷で和装本のように袋綴じされたものもあった。同じ作品が和装本とボール表紙本の両方で刊行される場合は、舶来のボール紙と背クロスをを用いるボール表紙本の方が高価であった。明治 20 (1887) 年以降に文芸書の主流となるのは、活版印刷の本文に、折丁の背を簡単にのり付けし、表表紙・背・裏表紙を一枚の紙でくるむ、手間や費用を抑えた紙装のくるみ製本である。後に、総クロスの表紙や革装、丸背など、くるみ製本ながら、より欧米の本格的な洋装本に近づいていった。

ボール表紙本は書店の目録や出版広告で洋装と表記されている場合がある。前節に挙げた先行研究が情報源とした目録などで洋装とされているものには、ボール表紙本が相当数含まれて

いると考えられる。

今野真二は、明治11年から15年くらいまでのボール紙表紙本は、官製の法や条例、その注解などの非文学作品が主であること、本文が銅版印刷の場合もあること、表紙デザインも簡素であることからすると、実用的で費用をかけない印刷物の製本方式であった可能性を指摘した。その時期に出版された翻訳文学『花柳春話』がよく売れたことから、明治10年代後半に美しくデザインされたボール紙表紙の文芸書の出版が盛んになったと推測している<sup>26)</sup>。

こうした簡易な洋装本であるボール紙表紙本の製本様式は、必ずしも一様ではない。木戸雄一は、綴じ方、表紙および背の材質、背の形状を調べることで、その多様性を示した<sup>27)</sup>

図3に示した明治9(1876)年に出版された『改訂 兵要日本地理小誌』は、本文が銅版の片面印刷の袋綴じ、三つ目綴じ、ボール紙表紙の洋装本であり、背と角に革を使う半革装(角革装)である。マール紙の貼り見返しで、ジョイント部に負荷がかかるため、前見返しの一部は破れている。明治10年代前半には、辞書など

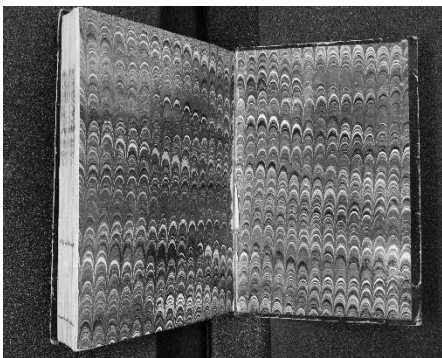


図3 中根淑. 『改訂 兵要日本地理小誌』  
(東京, 小林新兵衛, 明治9年). 外観と前見返し

も和装と洋装の両方が同時に出版されることがあった。

### (3) 洋式製本に携わる職人

日本への洋式製本の導入は、明治6(1873)年に印書局(後に紙幣寮活版局、現在の国立印刷局)に雇われたカナダ人パターソン(W.F. Paterson)によるとされている。彼が水野欽次郎や徳屋敬忠、上原金次郎などの日本人に洋式製本技術、特に革を使った諸製本(もろせいほん: 注文に応じて行う製本)と罫引など帳簿製本に関わる技術を教授し、製本の雛形を作ったり、マニュアル(製本術伝習順序)を定めた。後者の帳簿製本の流れは、パターソンの弟子が帳簿製本業に携わったことから推測できる。官の主導で導入、採用されていった。前者は紙幣寮から刊行され総革で製本されている事例に見られる。ただし、洋式製本を専門とする民間の製本所は明治6年頃に現れたとされるが、パターソンとの直接的な関わりは薄いと考えられる<sup>28)</sup>。

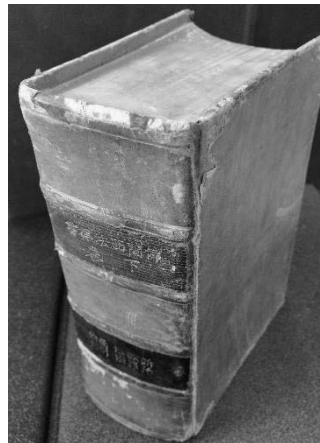


図4 総革装の翻訳局訳述  
『仏蘭西法律書』(下)  
(印書局, 明治8年)

図4は、印書局刊行の『仏蘭西法律書』(下: 訴訟法、商法、治罪法、刑法)で、総革装の洋式製本である。貼り見返し、飾りバンド、背にはタイトル等を金箔押しした革が貼りつけられた、くるみ製本である<sup>29)</sup>。同じタイトルは和装本としても刊行されている。

大正10(1921)年頃に製本機械が導入される以前は、洋式製本も職人による手作業で行われていた。日本においても、製本職人については和装、洋装を問わず、記録資料が残りにくい。



数少ない製本職人の談話として、和装本の職人の中から、洋式製本の技術を身につけ転身した者もいると推察されている。

鈴木俊幸は、明治期の製本師が自分が製本した和装本・洋装本に印を捺した例を指摘し、製本印と呼んでいる。印の場所は、巻末の刊記部分、綴じ目の欄外の下の方が多く、下綴じした後に押されたものと考えられる。洋装本としては明治 17 (1884) 年出版の後表紙見返しに丸善製本所の製本師、岡村甲介と印刷された紙片が貼られていることが紹介されている。製本印については、今後の解明が待たれる<sup>30)</sup>。

#### 4. 終わりに

本稿では、西洋における製本について概略を述べた。また、西洋においてそれぞれの用途に合わせて発展してきた *letter press binding* と *stationary binding* が、日本にも二つの流れとしてそれぞれ導入され、独自の工夫を加えつつ発展したことを確認した。

適切な資料保存を行うためには、個々の資料の物理的な製本構造を理解することが重要であ

る。また、すでに修復や改装がなされている場合は、どのような修復が行われたかを把握し、さらにそれが劣化した場合にはできるだけ原形に戻すことができるよう、元の製本構造を推測する必要がある。それにより、その本の受容についての手がかりを得られる可能性がある。東京大学および一橋大学が所蔵する洋古書の修復の調査については、続く 3 編を参照されたい。

製本は印刷、製紙の技術、読書様式や読者層と密接な関係をもっている。製本職人による文字記録が少ないことから、残された本そのものの調査を続けることで、製本について一層の解明が進むものと期待される。

【謝辞】 関場武・慶應義塾大学名誉教授からは『改訂兵要日本地理小誌』（図 3）をご恵贈にあずかるとともに、明治初期の辞書の装丁についてご教示いただいた。ここに謝意を表したい。

【附記】 本稿は科研費 16K12543 による研究成果の一部である。

（あがた まり：慶應義塾大学文学部教授）

- 1) Schmidt-Künsemüller, Friedrich Adolf. *Bibliographie zur Geschichte der Einbandkunst von den Anfängen bis 1985*. Wiesbaden, L. Reichert, 1987. 8,033 件は辞書や書誌も含めての数字である。
- 2) The British Library Board. *Database of bookbinding*. <http://www.bl.uk/catalogues/bookbindings/>.
- 3) Princeton University Library. *Hand Bookbindings: Plain and Simple to Grand and Glorious*. [https://lib-dbserver.princeton.edu/visual\\_materials/hb/](https://lib-dbserver.princeton.edu/visual_materials/hb/).
- 4) Foot, Mirjam M. “The future of bookbinding research”. *The Book Emcompassed: Studies in twentieth-century bibliography*. Davidson, Peter, ed. Winchester, St. Paul’s Bibliographies, 1998, p. 99-106.
- 5) Pearson, David. *English bookbinding styles 1450-1800: A handbook*. London, The British Library & Oak Knoll Books, 2005, reprinted 2014.
- 6) 洋書の製本構造の理解と修復については、『一橋大学社会科学古典資料センター年報』に掲載された一連の文献を参照のこと。岡本幸治. 保存情報としての製本構造 (1) ~ (4) : 西洋古典資料の保存のために. 一橋大学社会科学古典資料センター年報. 2000, vol. 20; 2001, vol. 21; 2003, vol. 23; 2004, vol. 24.
- 7) ある製本業のマニュアルには、かつては綴じの支持体に vellum を使ったために vellum binding と呼んだが、今は使わない方がよいとある。Modern bookbinding. Leicester, Raithby, Lawrence, 1929, p. 95.
- 8) Rogers, Frederick. *The art of bookbinding: A lecture delivered at South Palace Institute*. London, Swan Sonnenschein, 1897, p. 23. なお、それ以前にも vellum binders trade society が独立したものとして存在していた。この組合は 1911 年にその他の製本関係の組合と合併した。
- 9) 森脇優紀. 「読むための本」と「書くための本」—帳簿製本 (ステーションナリー・バインディング). 文献学の世界: 書物の装い. 慶應義塾大学文学部, 2018, p. 71-82.
- 10) 製本に関する用語は英語でも日本語でも必ずしも統一されていない。本稿では以下の用語辞典や引用文献を適宜参照した。Carter, John. 西洋書誌学入門. 横山千晶訳. 図書出版社, 1994.

- 11) ジュゼップ・カンブラス. 西洋製本図鑑. 市川恵里訳, 雄松堂, 2008.
- 12) 岡本幸治. 保存情報としての製本構造 (4): 西洋古典資料の保存のために. 一橋大学社会科学古典資料センター年報. 2004, vol. 24, p. 55-61.
- 13) ヘンリー・ペトロスキー. 本棚の歴史. 白水社, 2004.
- 14) Pearson, David. "17 Bookbinding". *The Oxford Companion to the Book*. Vol. 1, Oxford University Press, 2010, p. 147-155.
- 15) 野村悠里. 書物と製本術: ルリユール/綴じの文化史. みすず書房, 2017.
- 16) 石井研堂. 明治事物起原. 復刻版. 日本評論社, 1993, 下巻 p. 1436.
- 17) 牧野正久. 年報『大日本帝国内務省統計報告』中の出版統計の解析 (上). 日本出版史料 1. 日本出版学会, 出版教育研究所編. 日本エディタースクール出版部, 1995, p. 1-71.
- 18) 牧野正久. 年報『大日本帝国内務省統計報告』中の出版統計の解析 (下). 日本出版史料 2. 日本出版学会, 出版教育研究所編. 日本エディタースクール出版部, 1996, p. 1-85.
- 19) 大沼宜規. 明治期における和装・洋装本の比率調査: 帝国図書館蔵書を中心に. 日本出版史料 8. 日本出版学会, 出版教育研究所編. 日本エディタースクール出版部, 2003, p. 126-153.
- 20) 引野亨輔. 日本近代仏書出版史序説. *Journal of religious studies*. 2016, vol. 90, no. 1, p. 1-26.
- 21) 遠藤律子, 宮崎紀郎. 明治時代の書物の装幀: 印刷および諸技術の発展との関わりから見た装幀の変遷 (1). *デザイン学研究*. 2007, vol. 53, p. 69-78.
- 22) 白戸満喜子. 紙維新. 日本文学. 2007, vol. 56, p. 66-76.
- 23) 丸尾敏雄. "2.4.1. 明治から戦前まで". 紙の文化事典. 尾鍋史彦編. 朝倉書店, 2006, p. 21-26.
- 24) 西野嘉章. 装釘考. 玄風舎, 2000, p. 5; "なんきん (南京)". 製本のひきだし: 製本用語集. 東京都製本工業組合. <https://sei-hon.jp/glossary/> (2020/03/12 確認).
- 25) 岩切信一郎. "和装本から洋装本へ: その試行錯誤と展開". テキストとイメージを編む: 出版文化の日仏交流. 林洋子; クリストフ・マルケ編. 勉誠出版, 2015, p. 73-90; 岩切信一郎. "明治期の印刷と出版: 近代文芸装幀の変遷を中心に". 日本の文字文化を探る: 日仏の視点から. クリストフ・マルケ他編. 勉誠出版, 2010, p. 407-427.
- 26) 今野真二. "序章第1節 ボール表紙本とは何か". ボール表紙本と明治の日本語. 港の人, 2012, p. 8-18. この本の巻末には著者が所蔵する 284 点のボール表紙本の書誌データが掲載され、口絵には 36 点の写真が掲載されている。
- 27) 木戸雄一. 明治期「ボール表紙本」の製本. 国文学研究資料館文献資料部調査研究報告. 2000, vol. 21, p. 279-291.
- 28) 東京製本組合五十年史. 東京製本紙工業協同組合, 1955, p. 503-516.
- 29) 大貫伸樹は、くるみ製本に見られる表紙の溝はないが、糸かがり上製くるみ製本だと指摘している。大貫伸樹. 製本探索. 印刷学会出版部, 2005.
- 30) 鈴木俊幸. "洋装本の製本師". 書籍文化史料論. 勉誠出版, 2019, p. 432-433.